裸榧〈はだかがや〉（城東町）

日置〈ひおき〉の磯〈いそ〉ノ宮八幡さんには、大へん珍〈めず〉らしい榧の木があります。秋には裸の実がなるので、昔から「裸榧」と呼ばれていますが、今では、国の「天然記念物」に指定されています。

この裸榧は、その昔、足利尊氏〈あしかがたかうじ〉が京都の戦に敗れ、九州に逃げていく途中、曽地に住んでいた内藤入道道勝〈にゅうどうみちかつ〉の家にとめてもらい、磯ノ宮八幡さんにお祭りした時のことです。
「どうぞ、お召し上りください。」
「やあ、これは珍らしい。どうもありがとう。」
尊氏は、お茶菓子として出された榧〈かや〉の実の皮を取って、食べようとしましたが、
「やや、これは固い、固い。固い実は縁起〈えんぎ〉がよいぞ。」
とつぶやきながら、たいへん喜んで裏庭に一粒の実を植えておきました。そして、八幡さんに、
「この実が芽を出して大きく育ち、きっと戦に勝つことができますように。」
とお祈りしました。
そして、わずかの家来〈けらい〉を引き連れて、西へ西へと落ちのびていきました。

それから十日過ぎ、二十日過ぎるうちに、榧の実は芽を出して、だんだん大きくなっていきました。
三年も過ぎたころ、木は二メートルにも伸〈の〉び、榧の実が数粒なり始めました。
しかし、これは不思議。どの実もこの実も皮のない実がなっているではありませんか。
この話を聞いた村人達は、
「そんなことがあるものか、きっと凶作になるしるしじゃないか。」
「いや、今年は、栗や柿のなり年だろう。」
「でも、不思議なこともあるもんじゃ。」
と、わいわいさわぎ始めました。

今では、木の根本のさしわたしが、二メートル以上もある大きな木になり、毎年秋になると、皮のない榧の実がいっぱいなっています。
この「裸榧」の実を植えて育てても、裸の榧の実はなりません。